

自伝的記憶想起における視点と自己評価との関連

女子大学生の不安傾向・解離傾向に焦点をあてた検討

眞榮城 和美・関根 和生

The relationship between point of perspective in autobiographical memory and self-evaluation
: Focusing on anxiety and dissociative tendency of female college students in Japan

Kazumi MAESHIRO, Kazuki SEKINE

1. 問題と目的

人が自伝的な記憶を想起する際の視点として、Nigro & Neisser (1983)は、「視野視点(Field perspective: 以下F視点と表記)」と「観察者視点(Observer perspective: 以下O視点と表記)」という二種類の視点の存在を指摘した。F視点とは、元の出来事と同じように自分自身の視点(視野)から記憶イメージを想起する視点のことである。O視点とは記憶を想起する際に、自分自身を含む出来事全体を、観察者のように、出来事の外側から想起する視点のことである。Nigro & Neisser (1983)は、記憶内容が感情喚起的であり、また自分自身の内的な意識に焦点が向いている場合には、O視点から想起される傾向にあることを見出している。しかしながら、Nigro & Neisser (1983)とはほぼ同様の実験手法を用い、自伝的記憶の想起とその時点での感情喚起の程度について検討した越智(2003)は、Nigro & Neisser (1983)が報告しているような感情喚起と視点、自己への注意と視点との関連は認められなかったとし、自伝的記憶想起という現象の不安定さを指摘している。

研究と実験手法、分析手法の違いによる結果の不安定さ(越智, 2003)を考慮すると、新たな研究手法を用いたF視点、O視点と自己感との関連の検討は意義のあるものであると考えられる。例えば、「社会不安」と「視点」との関連について検討した Spurr & Stopa(2003)は、「社会不安」の傾向が高い者は低い者よりもO視点から記憶を想起しやすいことを実証している。また、社会不安の高い群と低い群の双方にO視点(自分自身を外側から観察しているイメージ)を意識する場面と、F視点(自分自身よりもできるかぎり周囲の様子に注意を払っているイメージ)を意識する場を事前に提示した実験からは、社会不安高群においてO視点取得時にネガティブ思考になる頻度が高かったことが認められている。さらに、Spurr & Stopa(2003)はO視点を意識することのプラス面についても興味深い実験結果を示している。社会不安の高い者がO視点取得状況でスピーチ・パフォーマンスを行い(パフォーマンスの様子を録画)、パフォーマンス後に自身のVTRを見た際、VTRを見る前よりも自己評価が上昇していることが認められた。つまり、普段、不安の高い者ほど、自分を観察する視点(O視点)で日常生活を送ることが多く、ゆえに自分自身に対する評価が厳しくなっていることが推察され、実際に自分の行動をVTRで観察した後は、「思っていたほど悪くない」といった自己評価が得られたのではないかと考えられる。

このように、特定のパーソナリティー傾向を持つ者に対する視点の操作が、自己評価に影響を与えるという結果から、「視点」という概念が個人内のイメージや認知的処理の研究領域のみならず、実践的、臨床的にも有用な概念であることが示唆される。そのため、視点とパーソナリティー特性との関係を多角的に捉えていくことが必要となる。例えば、日常的にO視点取得傾向が高くなる者としては、社会不安の高い者のみならず、解離傾向の高い者との関連が予想される。解離性尺度には「実際に自分自身を眺めているように感じる」などO視点取得と関連していると考えられる項目が含まれており、特に離人傾向とO視点との関連が想定される。

そこで本研究では、「自伝的記憶想起」と「自己評価」との関連について明らかにすることを目的とし、研究1として、自伝的記憶想起時の取得視点(F視点,O視点)と関連があると想定される不安傾向尺度・解離傾向尺度を用いた質問紙調査を実施する。さらに、研究2において面接調査を実施し、自伝的記憶想起時の取得視点(F視点, O視点)による自己評価の差異について検討する。

2. 研究1 質問紙調査に基づく「視点と自己評価」との関連検討

2.1 目的

記憶想起時の取得視点と関連があると想定される不安傾向尺度および解離傾向尺度を用い、自己評価との関連について質問紙に基づく検討を行う。

2.2 方法

2.2.1 調査方法

調査対象者は関東近郊の女子大に通う学生103名。平均年齢は19.71歳(SD=0.94)であった。授業中に担当教員が質問紙を配布、回収する方式で実施した。回収率83.3%、調査期間は2004年9月であった。

2.2.2 調査内容 [質問紙調査]

① 自己評価尺度

Self-Perception Profile for College Students (Neemann & Harter, 1986: 以下SPPCSと表記)の日本語簡易版(眞榮城, 2003)を使用した。本尺度は多側面的な自己評価を測定できるようになっており、次の下位尺度から構成されている。

「学業能力評価 (例: 自分の専攻する勉強に自身がある): 4項目」

「運動能力評価 (例: スポーツは人よりうまいと思っている): 4項目」

「容姿評価 (例: 自分の外見に満足している): 4項目」

「親友関係評価 (例: 信頼できる親しい友人をつくれる): 4項目」

「道徳性 (例: 道徳的に正しいとわかっていてもそうしないことがある*): 4項目」

「異性関係評価 (例: ロマンティックな関係(恋愛関係)を発展させるのは難しいと思う*): 4項目」

「知的能力評価 (例: 人並みに頭がよいかは分からない*): 4項目」

「創造性評価 (例: 自分は独創的だと思う): 4項目」

「社交性評価 (例: 社交的だと思っている): 4項目」

「ユーモアセンス評価 (例: 自分が馬鹿げたことをすると笑えない*): 4項目」

「職業能力評価 (例: 新しい仕事をする能力については自信がある): 4項目」

「父親(母親)との関係性評価 (例: 父親(母親)といるとくつろげる): 各4項目, 計8項目」

以上の13側面, 計52項目と、この自己評価の13側面の上位概念として想定されている「自己受容感(自分に満足している): 6項目」を含めた58項目。*は逆転項目を意味している。

回答方法は「はい」「少しはい」「少しいいえ」「いいえ」の4段階で施行。各項目で評価の高い反応から4, 3, 2, 1点と得点化した(本研究では下位因子構造が確認された10側面を使用している)。

② 不安傾向測定尺度

State-Trait Anxiety Inventory 日本語大学生版(清水・今栄, 1981: 以下STAIと表記)を使用した。STAIは、今現在どの程度不安を感じているかについて問う「状態不安(state)」に関する20項目(固くなっている・どうてんしている など)と、普段、一般的にどの程度不安を感じているかを問う「特性不安(trait)」に関する20項目(疲れやすい・ささいなことに思いわずらう など)から構成されている。評定方法はいずれも「全くそうではない」～「全くそうである」の4段階で施行。各項目で評価の高い反応から4, 3, 2, 1点と得点化した。

③ 解離傾向測定尺度

解離傾向を測定するため、臨床群以外でも使用が可能であることが確認されている解離体験尺度 An Updated Version of Dissociative Experiences Scale (仲, 1998: 以下DESと表記)を使用した。DESでは日常生活で体験しうることがらについて28の質問項目を設定している(例: 車を運転したりバスや地下鉄に乗っていて、突然、そこまでの経路を全くあるいは部分的に思い出せないことに気づく、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください)。回答方法は被験者がどの位の頻度で体験しているかについて、全く経験がない0%～常に体験する100%までの10件法であり、該当する%値を○で囲んでもらう形式で実施した。

DESについては3つの下位尺度を想定することが一般的とされており(田辺,2004)、「健忘」「離人」「没入・想像活動への関与」に分けることができる。「健忘」とは物忘れから記憶喪失まで幅広い意味を有しているが、解離性健忘としての健忘は、「重要な個人的情報で、通常外傷的またはストレスの強い性質を持つものの想起が不可能になり、それがあまりにも広範囲にわたるため通常の物忘れでは説明できないような1つまたはそれ以上のエピソードを持つこと」と定義されている(DSM-IV, 1995)。離人については、離人症性障害(DSM-IV, 1995)の中で「自分の精神過程または身体から遊離して、あたかも自分が外部の傍観者であるかのように感じている持続的または反復的な体験」と定義されている。没入については、DSMでの明確な定義は無いため、本研究では、外界からの刺激を遮断し、自己の関心事や想像活動のみに関心を寄せている様子として没入を定義する。没入は解離傾向との関連が想定される。

2.3 結果

2.3.1 自己評価得点

自己評価尺度について、下位尺度別の内的整合性を確認したところ、 $\alpha = .65 \sim \alpha = .85$ とほぼ妥当な値が認められた。そこで、下位尺度別に平均値と標準偏差を算出した(Table1参照)。平均値は項目数で除した値を使用した。その結果、異性関係評価、容姿評価、知性評価が他の側面よりも低く、母子関係得点が一番高いという結果が示された。

Table1 自己評価側面の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
自己受容感	2.16	.68
創造性	2.34	.58
学業能力	2.00	.59
社交性	2.24	.73
容姿	1.83	.66
母子関係	3.31	.65
父子関係	2.82	.88
親友関係	2.87	.72
知性	1.90	.59
道徳性	2.45	.57
異性関係	1.92	.58
ユーモア	2.61	.58
職業能力	2.34	.69
運動能力	2.00	.80

2.3.2 不安傾向得点

状態不安と特性不安について平均値と標準偏差を算出した(Table2参照)。状態不安の平均値は45.22(SD=9.45)、特性不安の平均値は49.64(SD=10.16)であり、平均値の差のt検定を行った結果、特性不安が状態不安よりも高いことが認められた($t(97) = -3.03, p < .01$)。

Table2 不安の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
状態不安	45.22	9.45
特性不安	49.64	10.16

N=101

2.3.3 解離傾向得点

下位尺度の内的整合性を確認したところ、「健忘」に関する13項目 $\alpha = .84$ 、「離人」に関する7項目 $\alpha = .84$ 、「没入」に関する6項目 $\alpha = .80$ と十分な値が認められた。そこで、下位尺度得点を合計したものと、下位尺度別に平均値と標準偏差を算出した(Table3, Figure3-Figure5 参照)。図の右横には、それぞれの下位尺度における代表的な質問項目を記載した。平均値は項目数で除した値を使用した。ヒストグラムに示されているように、解離体験をしている被検者は多くはないものの存在することが認められた。

Table3 解離傾向の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
離人傾向	1.08	1.48
没入傾向	2.16	1.72
健忘傾向	1.34	1.23

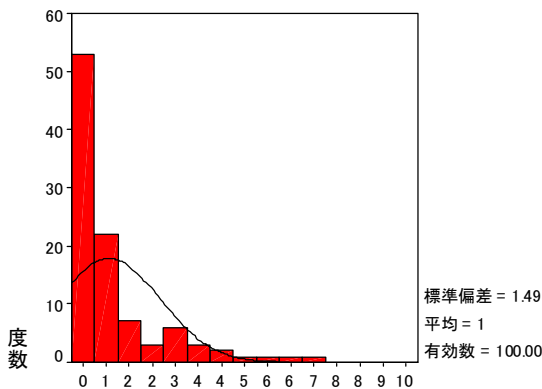


Figure3 離人に関するヒストグラム

例: 自分の傍らに別の自分が居るように感じたり、自分が何かをしているのを別の自分が眺めているように感じたりする、いわば他人を見るのと同じように自分自身を見るというような体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。

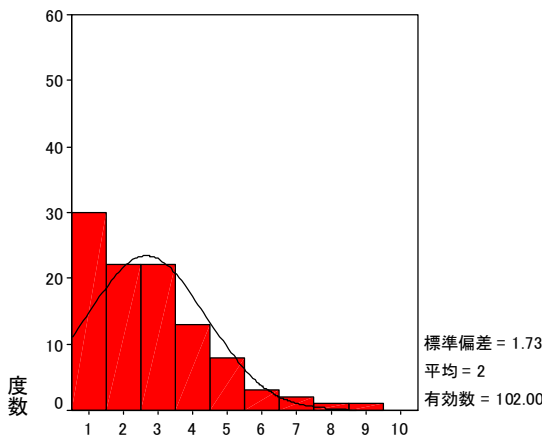
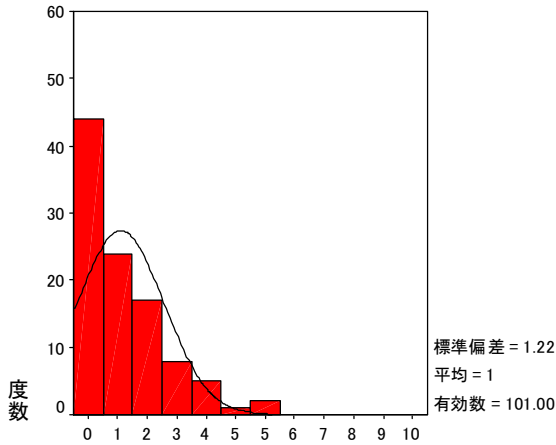


Figure4 没入に関するヒストグラム

例: テレビや映画を観ている時、物語に引き込まれてしまい、周りで起こったことに気がつかない、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。



例：車を運転したりバスや地下鉄に乗っていて、突然、そこまでの経路を全くあるいは部分的に思い出せないことに気づく、という体験をする人がいます。あなの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。

Figure5 健忘に関するヒストグラム

2.3.4 不安傾向と解離傾向との関連

不安傾向測定尺度の下位尺度である「状態不安」と「特性不安」は、すべての解離傾向の下位尺度との間に正の相関が認められた[状態不安×離人傾向($r=.29, p<.01$), 状態不安×没入傾向($r=.36, p<.01$), 状態不安×健忘傾向($r=.26, p<.01$), 特性不安×離人傾向($r=.33, p<.01$), 特性不安×没入傾向($r=.37, p<.01$), 特性不安×健忘傾向($r=.32, p<.01$): Table4 参照]。

	離人傾向	没入傾向	健忘傾向
状態不安	.29**	.36**	.26**
特性不安	.33**	.37**	.32**

** $p<.01$

2.3.5 不安傾向・解離傾向と自己評価との関連

不安傾向・解離傾向と自己評価との関連について検討するため、「状態不安」・「特性不安」および解離傾向の下位尺度である「健忘傾向」・「離人傾向」・「没入傾向」と「自己評価の各側面」の相関を算出した。

「状態不安」と「自己受容感」($r=-.38, p<.01$), 「学業能力評価」($r=-.23, p<.05$), 「社交性」($r=-.36, p<.01$), 「母子関係」($r=-.26, p<.05$), 「父子関係」($r=-.34, p<.01$), 「親友関係」($r=-.34, p<.01$), 「道徳性評価」($r=-.22, p<.05$), 「ユーモアセンス」($r=-.38, p<.01$)との間に負の相関が認められた (Table4-2 参照)。「特性不安」と自己評価との相関分析からは、運動能力評価以外の自己評価側面において負の相関が認められた(特性不安×職業能力評価 $r=-.23, p<.05$ ~特性不安×自己受容感 $r=-.66, p<.01$)。

「離人傾向」と「親友関係評価」($r=-.35, p<.01$), 「道徳性評価」($r=-.32, p<.01$), 「母子関係評価」($r=-.31, p<.01$), 「異性評価」($r=-.20, p<.01$)および「自己受容感」($r=-.36, p<.01$)との間に負の相関が認められた。「没入傾向」と「学業能力評価」($r=-.34, p<.01$), 「親友関係評価」($r=-.39, p<.01$), 「道徳性評価」($r=-.34, p<.01$), 「母子関係評価」($r=-.19, p<.05$), 「社交性評価」($r=-.20, p<.05$), 「知性評価」($r=-.25, p<.01$), 「ユーモアセンス評価」($r=-.23, p<.05$)および「自己受容感」($r=-.31, p<.01$)との間に負の相関が認められた。「健忘傾向」と「学業能力評価」($r=-.30, p<.01$), 「社交性」($r=-.20, p<.05$), 「容姿評価」($r=-.24, p<.01$), 「親友関係評価」($r=-.41, p<.01$), 「知性」($r=-.26, p<.01$), 「道徳性評価」($r=-.38, p<.01$), 「ユーモア」($r=-.20, p<.05$)および「自己受容感」($r=-.34, p<.01$)との間に負の相関が認められた。(Table5 参照)。

Table5 不安傾向・解離傾向と自己評価との関連

	状態不安	特性不安	離人傾向	没入傾向	健忘傾向
自己受容感	-.38**	-.66**	-.36**	-.31**	-.34**
創造性	-.15	-.35**	-.10	-.06	-.06
学業能力	-.23*	-.44**	-.22**	-.34**	-.33**
社交性	-.36**	-.51**	-.17	-.20*	-.20*
容姿	-.12	-.28**	-.12	-.15	-.24*
母子関係	-.26*	-.27**	-.31**	-.18	-.11
父子関係	-.27*	-.44**	-.18	-.17	-.14
親友関係	-.34**	-.52**	-.35**	-.39**	-.41**
知性	-.18	-.32**	-.17	-.25**	-.26**
道徳性	-.22*	-.30**	-.32**	-.28**	-.38**
異性関係	-.13	-.23*	-.20*	-.10	-.04
ユーモア	-.38**	-.36**	-.14	-.23*	-.20*
職業能力	-.10	-.23*	-.18	-.06	-.02
運動能力	-.18	-.12	-.05	-.01	-.05

**p<.01, *p<.05

2.4 考察

自伝的記憶想起時のO視点取得傾向と関連があると想定される不安傾向と解離傾向の間には正の相関が認められたことから、解離傾向尺度においてもO視点取得傾向と関連があるものと考えられる。さらに、不安傾向および解離傾向と自己評価の側面との間に負の相関が認められたことから、不安傾向や解離傾向の高い者の自己評価は低いことが示唆されたものと推察される。以上の結果から、不安傾向や解離傾向の高い者は、自伝的記憶をO視点から想起しやすく、F視点から想起する傾向にある者よりも低い自己評価を抱きやすいことが予想される。

しかしながら、研究1で示された結果は質問紙調査のレベルであり、O視点から想起しやすい者の自己評価がF視点から想起する傾向にある者よりも低い傾向にあるという結論については推測の域を出ていない。そこで、研究2において記憶想起時の取得視点が自己評価得点にどのような差異を生じさせているかについて検討する。

3. 研究2 自伝的記憶想起時の取得視点による自己評価・不安傾向の検討(面接調査)

3.1 目的

研究2では、実際に面接調査にもとづいて想起時の視点に関するデータを収集し、自伝的記憶想起時の視点(F視点, O視点)と自己評価得点との関係を調べることを目的とする。

3.2 方法

3.2.1 調査方法 研究1の質問紙調査時に面接調査への協力を依頼。承諾の得られた者の内、解離傾向得点高群10名、低群10名の計20名に対し記憶想起に関する面接調査を行った。面接には質問紙調査を実施した大学の空き教室(50名程度収容可能なサイズ)を利用した。椅子を2つ設置し、面接者と調査者が対面する形で実施した。参加者の面接時における言語的・非言語的コミュニケーションを記録するため、ビデオカメラを設置した。録画に際しては、参加者から承諾を得て実施した。面接所要時間は一人20分程度であった。

3.2.2 調査内容 面接時には自伝的記憶想起を促すため、下記の内容について質問した(Table6参照)。

3.2.3 面接実施順序

Nigro&Neisser(1983)と関根(2004)を参考に、調査対象者に想起してもらった6つの出来事を選定した(Table6)。参加者には、過去の記憶に関する調査であることを告げ、記憶想起時の2つの視点について詳しく説明した。それから、実験者が尋ねた出来事に関する、特定の自伝的記憶を想起してもらい、具体的に、い

つ、何処で、誰が、何をしたということを語ってもらった。特定の出来事を語った後に、その出来事を体験した時の年齢、想起した記憶の鮮明度(1・とても鮮明～4・全く不鮮明までの4段階評定)、記憶想起時による自己喚起度(1・自分自身のことを強く意識した～4・全く自分自身を意識しなかったまでの4段階評定)を口頭で求め、最後に記憶想起時の視点(F 視点か O 視点か)を尋ねた。同様の手続きを、Table6 に記載した順番で、出来事ごとに行なった。

Table6 想起する出来事

①	幼児期(6歳以下)の一番楽しかった出来事
②	幼児期の一番悲しかった出来事
③	恐怖体験
④	人前での発表
⑤	大きな事故や怪我の体験
⑥	恥をかいた出来事

3.3 結果

①から⑥の計6場面において求めた記憶想起時の視点のうち、6場面中4場面以上でF視点を取得した者をF視点取得者とし、4場面以上でO視点を取得した者をO視点取得者として分析に用いた。F視点取得者は14名であり、O視点取得者は6名であった。

3.3.1 自伝的記憶想起時の取得視点による記憶鮮明度

自伝的記憶想起後に記憶の鮮明度を4段階評定で回答してもらい、6場面の評定値の合計を記憶鮮明度(6点～24点)として分析に用いた。取得視点(F視点,O視点)による記憶鮮明度の差のt検定を行った結果、有意な差は認められなかった[F視点:M=12.36(2.65),O視点:M=10.67(4.76),t(18)=1.03,n.s.]。

3.3.2 自伝的記憶想起時の取得視点による自己喚起度

自伝的記憶想起後に記憶を想起した際の自己喚起度を4段階評定で回答してもらい、6場面の評定値の合計を自己喚起度(6点～24点)として分析に用いた。想起時の視点(F視点,O視点)による自己喚起度の差のt検定を行った結果、有意な差は認められなかった[F視点:M=13.00(2.69),O視点:M=10.50(5.86),t(18)=1.33,n.s.]。

3.3.3 自伝的記憶想起時の取得視点による自己評価得点

想起所の視点(F視点,O視点)による自己評価得点の差の検定を行ったところ、O視点取得者がF視点取得者よりも「自己受容感」(t(18)=2.02, p<.05), 「容姿評価」(t(18)=2.59, p<.05), 「知性」(t(18)=2.23, p<.05)の低いことが認められた(Table7参照)。

Table7 取得視点による自己評価の差

		N	平均	標準偏差	t値	df
自己受容感	F視点	14	2.36	0.65	2.02 *	18
	O視点	6	1.69	0.53		
創造性	F視点	14	2.48	0.64	-0.18	18
	O視点	6	2.54	0.75		
学業能力	F視点	14	2.09	0.46	1.19	18
	O視点	6	1.79	0.64		
社交性	F視点	14	2.20	0.73	-0.13	18
	O視点	6	2.25	1.10		
容姿	F視点	14	1.86	0.66	2.59 *	18
	O視点	6	1.13	0.31		
母子関係	F視点	14	3.41	0.68	0.64	18
	O視点	6	3.17	1.02		
父子関係	F視点	14	2.79	0.98	0.84	18
	O視点	6	2.38	1.06		
親友関係	F視点	14	2.64	0.64	-1.07	18
	O視点	6	3.08	1.23		
知性	F視点	14	2.05	0.53	2.23 *	18
	O視点	6	1.50	0.45		
道徳性	F視点	14	2.41	0.74	-0.91	18
	O視点	6	2.75	0.82		
異性関係	F視点	14	2.00	0.60	0.79	18
	O視点	6	1.75	0.74		
ユーモア	F視点	14	2.64	0.55	-0.39	18
	O視点	6	2.75	0.59		
職業能力	F視点	14	2.50	0.73	-0.31	18
	O視点	6	2.63	1.01		
運動能力	F視点	14	2.11	0.79	0.49	18
	O視点	6	1.92	0.85		

*p<.05

3.4 考察

自伝的記憶想起時の視点(F視点, O視点)により, 記憶鮮明度と自己喚起度に差異が生じるか否かを検討した結果, 有意な差は認められなかった。つまり, 記憶内容が感情喚起的であり, また自分自身の内的な意識に焦点が向いている場合には O 視点から想起される傾向にあるという先行研究の知見(Nigro&Neisser, 1983)は支持されず, 本研究においても越智(2003)と同様, 感情喚起と視点, 自己への注意と視点との関連は認められなかった。このことから想起時の視点と想起時の内的体験との関係は一貫性のないものであることが示唆された。

一方, 自伝的記憶想起時の視点(F視点, O視点)による自己評価の得点差については, 自己受容感, 容姿評価, 知性評価においてO視点取得者がF視点取得者よりも低い値を示していた。この結果から, 記憶想起時にO視点(観察者視点)を用いやすい者は, F視点(視野視点)を用いやすい者よりも自己を受け入れにくく, 自分の知性や容姿についても厳しい評価を抱えていることが示唆された。つまり, 日常的にも自己を客観視することが多く, 記憶想起時にも自己を観察する視点を多用する者は自己を受容しにくい傾向があり, さらに, 自身の知的能力および容姿に対する自信を持ちにくい傾向があるものと考えられる。

4. 総合考察

自伝的記憶は人間に自己の一貫性を与える(佐藤,2004)との指摘があるように, 自伝的記憶と自己との密接な関連はさまざまな研究により明らかにされている(例えば, Neimeyer&metzler,1994: 野村, 2002)。本研究では, 自伝的記憶想起時の視点(F視点, O視点)と自己評価との関連について質問紙調査と面接調査に基づく分析を行った。その結果, O視点(観察者視点での記憶想起)が優勢な者はF視点(視野視点での記憶想起)が優勢な者よりも自己評価が低いことが認められた。これは, 日ごろから自分自身を観察者の視点で評価していることと強く関連しているものと推測され, 自分自身を客観視する傾向が強いあまりに自己に対する認識が厳しくなり, 自己評価が低下し

ているものと考えられる。この結果は,Spurr & Stopa(2003)によるスピーチ・パフォーマンス実験の臨床的有効性を裏付ける結果であると推察される。社会不安の高い者がO視点取得状況でスピーチ・パフォーマンスを行い(パフォーマンスの様子を録画)、パフォーマンス後に自身のVTRを見た際、VTRを見る前よりも自己評価が上昇していた(Spurr&Stopa,2003)ことは、本研究によりO視点取得傾向との関連が認められた解離傾向が高い者に対して同様の実験を行った場合にも実験後に自分のパフォーマンスに対する自己評価が上昇する可能性が考えられる。つまり、日常的にO視点を獲得しやすい被験者に対するVTRを用いた介入方法の臨床的有効性を支持する基礎的研究成果が得られたものと言えよう。

5.今後の課題

本研究では女子大学生のみを被験者としているため、得られた結果をさらに一般化していくためには、男性を対象とした調査および調査対象年齢・調査対象者数の拡大が求められる。また、自伝的記憶想起時の視点と想起時の内的体験との間に一貫した関係がみられなかったが、それが方法論特性や面接時のコンテキストに影響を受けるものなのかどうかについては今後検討していく必要がある。本研究においては、面接調査の言語的データのみを取り扱っており、非言語データには配慮しなかったが、想起時の視点と身振り表現とが関係しているという報告がある(関根, 2004)。今後はさらに、自伝的記憶想起と身振りの観察データ分析を加え、不安を喚起するような歪んだ記憶の修正に役立つ基礎データとしての「視点」と「自己」との関連について明らかにしていく必要があるものと考えている。

引用文献

- American Psychiatric Association, 高橋三郎, 大野裕, 染矢俊幸(訳) 2003 DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引, 医学書院
- 眞榮城和美 2003 自己評価に関する発達心理学的研究 白百合女子大学大学院文学研究科博士論文
- 仲真紀子 1998 偽りの記憶と諸尺度 -被暗示性尺度(GSS, CIS)と解離体験尺度(DES) 千葉大学教育学部研究紀要 第46巻 I:教育科学編 p1-7.
- Neemann, J., & Harter, S. 1986. Self-Perception Profile for College Students. University of Denver.
- Neimeyer, G. J., & Metzler, A. E. 1994 Personal identity and autobiographical recall, In U. Neisser & R. Fivush (Eds.) The remembering self. Construction and accuracy in the self-narrative, 105-155. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nigro, G., & Neisser, U. 1983 Point of View in Personal Memories Cognitive Psychology 15, 467-482.
- 野村晴夫 2002 高齢者の自己語りと自我同一性との関連 -語りの構造的整合・一貫性に着目して- 教育心理学研究, 50 95-106.
- 越智啓太 2003 自伝的記憶における「視点の問題」 第45回日本教育心理学会発表論文集, p711.
- 佐藤浩一・榎洋一・下島裕美・堀内孝・越智啓太・太田信夫 2004 自伝的記憶研究の理論と方法 日本認知科学会 <http://www.jcss.gr.jp/technicalreport/TR51.pdf>
- 関根和生 2004 自伝的記憶想起における視点とジェスチャー表現との関係 日本発達心理学会第15回大会発表論文集, p347.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成. 教育心理学研究 29, 348-353.
- Spurr, J. M., & Stopa, L. 2003 The observer perspective: effects on social anxiety and performance Behavior Research and Therapy 41, 1009-1028.

田辺肇 2004 DES一尺度による病理解離性の把握— 臨床精神医学 増刊号 精神科臨床評価・検査法マニュアル, 293-307.

(受付日: 2007年1月15日)

SUMMARY

This study examined associations between perspective in autobiographical memory (Field perspective or Observer perspective) and self-evaluation. Questionnaire research subjects were 103 female college students in Japan (age M=19.71, SD=.94). 20 participants (F:N=10, O:N=10) joined interview. The results indicated that self-evaluation(intellectual ability, physical appearance and global self-worth) of the observe perspective takers were lower than the field perspective takers.